



香港とソウルでの研究発表を終えて

神戸大学 経済経営研究所
講師 藤山 敬史

昨年の10月に香港とソウルに合わせて約2週間滞在した。香港はまだまだ蒸し暑く、日中は半袖のシャツで過ごした。ソウルでは秋の気配が感じられた。ちょうどハロウィンの時季だったので、韓国では簡単なハロウィン・メイクもしてもらい（頬に大きな傷を負った）、雰囲気を楽しむことができた。

今回の滞在の目的は3つの大学で研究発表を行うことであった。3つの大学とは香港中文大学・香港バプティスト大学・高麗大学校である。どの大学も研究が盛んな大学であり、アメリカなどで博士の学位を取得した研究者が多く在籍している。なお、QSランキングのAccounting & Finance部門において香港中文大学はグローバルで21位、アジアで3位、高麗大学校は同46位と11位である（ちなみに、日本の大学でランキングが最も高い東京大学はそれぞれ40位と8位）。今回はこれらの大学でそれぞれ90分から120分の枠をもらって研究を発表し、その研究をブラッシュアップしようというのである。

一昨年にソウル大学校にて90分の枠をもらってプレゼンをしたのが初めてであり、今回は2回目の経験であった。ソウル大学校ではとにかく無我夢中でヘトヘトになり、プレゼン後の研究打合せを翌日に延期してもらった。プレゼン後、すでに就職の決まっていた院生たちとご飯を食べたのはいい思い出である（実は、そのうちの1人が香港の大学に就職し、今回の滞在でも世話をしてくれた！）。

少し話がわき道に逸れたが、今回のプレゼンの目標は分析手法上のアドバイスをもらうことに加えて、日本企業のデータを使った研究を外国人にどのように伝えるのかにあった。他の分野について詳しくは知らないが、海外の会計研究者の間では日本企業の特徴についてあまり理解がされていない。極端に言うと、「日本企業ってどんなイメージ？」と聞くと、「メインバンク！」「他は？」「う～ん、ハハハ」という感じである。このような中で、研究のコンテキストについてどのように伝えていくのが良いのかについて、研究発表を通じて学びたいというのが目的の1つであった。

どの大学でも、皆、真剣に話を聞いてくれ、さまざまな観点から質問をしてくれた。香港

の研究者は彼らのイメージする企業像が主に中国やアメリカのものであり、韓国は制度が日本と類似している部分もあり（日本から輸入したという側面も大きい）、韓国のほうが日本の実態を説明しやすいように感じた。ただ、今回の目的からすると、香港の研究者に日本企業についてどのように伝えるのか、どのような質問が来るのかということを経験できたことはとても大きなことであった。もちろん、仮説や分析手法についても有用なアドバイスをくれた。

今後、日本の研究者も海外の英文学術誌への論文掲載を求められることが多くなるかもしれない。すでに香港やシンガポール、韓国、台湾では研究者にそのようなプレッシャーがかかっており、また、そういった雑誌へ論文を掲載するにはどうしなければならないのかについてノウハウの蓄積もある。これらの国や地域へは日本から数時間で行くことができ、研究の内容（分析内容）だけでなく論文全体として質を向上させていくにあたって、彼らと議論を交わすというのはとても良い機会であると思う。

最後に、評価の高い英文雑誌への掲載を目指す同世代の研究者と交流できたことも研究を続けるうえでモチベーションとなった。昼食や夕食を彼らとともにし、どのような雑誌に投稿しているのかを聞いたり、そして、時にはレビューに対する愚痴などを話し合ったりと、楽しい時間を過ごすことができた。今後も彼らとこういった場を持てるよう、一定の質以上の研究を続けていきたいと思った。何の実績もない若手研究者を快く受け入れてくれ、貴重な機会を提供してくれた3つの大学には心から感謝を申し上げたい。